

# Production of Paper-Umbrellas in Modern China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30441">http://hdl.handle.net/2297/30441</a>

## 近代中国における紙傘の生産をめぐって

周 如軍<sup>1\*</sup>

2011年9月15日受付, Received 15 September 2011  
2011年12月13日受理, Accepted 13 December 2011

### Production of Paper-Umbrellas in Modern China

Rujun ZHOU<sup>1\*</sup>

#### Abstract

The main purpose of this research is to examine the production trend of traditional paper umbrellas in modern China. Statistically, the material for handmade paper umbrellas in modern China is quite defective and shows imperfections. Additionally, it has given the image that the manufacturing industry of paper umbrellas has declined gradually. However, the production form of these handicraft has been firmly maintained, and improvements have sometimes been made from the traditional paper umbrella to the more recently made paper umbrellas in the handicrafts. The material of the handcrafted paper umbrella was the hand-made paper made of a raw bamboo material. Because of this, handcrafted paper umbrellas are usually produced in the main producing districts of hand-made paper. Peasants often produce it on the side, in their homes in the farm villages of the place among the mountains where bamboo grows abundantly (since this is also the raw material for hand-made paper in China). Wage workers who produce umbrellas made by the handicrafts often produce them in the umbrella store of the local city or town. But, most of the workshops to manufacture paper umbrellas that include the paper umbrella shops are small-scale, and there are not many wage workers who manufacture paper umbrellas.

**Key Words:** China, modern, hand-made paper, paper-umbrella, improvement  
キーワード: 中国, 近代, 土紙, 紙傘, 改良

#### I. はじめに

筆者は、これまで近代中国において在来製紙（土紙）業が盛んだった浙江省・江西省・福建省などにおける土紙生産の動向について考察してきた。その中で、近代中国における土紙業の根強い存続が、土紙に対する根強い需要と消費によって支えられていたことを明らかにした<sup>(註1)</sup>。そして、その土紙の用途のうち、宗教儀式用の焼紙と並んで重要だったのが、土紙を材料として作られた様々な紙関連製品で、そ

の代表的なものの1つに紙傘があった。

中国では、近代以前から傘が生産されてきたが、それは全て紙傘であり、清末に開港してから西欧の布傘が輸入されるようになると、紙傘の売れ行きが悪くなった。このため、民国初年には工場を設立して布傘を模倣して生産するようになったので、洋傘を陽傘と呼ぶようになり、紙傘は雨傘と呼ばれるようになった。そして、1915年に日本の対華21カ条約要求を受諾したことから発生した日本商品ボイコット運動は国産の陽傘の生産と紙傘の改造を促進し、

<sup>1</sup>金沢大学外国語教育研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Foreign Language Institute, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

\*連絡著者 (Author for correspondence)

紙傘は愛国傘と呼ばれるようになった<sup>(注2)</sup>。

近代中国における紙傘製造業に関する研究は、管見の限り皆無であり<sup>(注3)</sup>、また、紙傘の生産動向を知ることができるまとまった資料も見当たらないが、同時代的観点から紙傘について論じたものや紙傘の生産にかかわる部分的な統計はある。

そこで、本稿では、まず統計数値などから近代中国における紙傘の生産の全体的な動向を概観し、ついで、県志類などの資料も合わせて利用しながら、各省における紙傘の生産動向について見ていきたい。なお、本稿では、煩雑さを避けるために、史料・資料などからの引用部分をも含めて、原則として常用漢字と算用数字を用いることにした。

## II. 紙傘の生産

### 1) 概況

1920年代末の資料によれば、紙傘の主要な生産地は江蘇・広東・湖南・湖北・福建などの諸省で、とりわけ江蘇省の高郵・鎮江、浙江省の杭州・温州、広東省の広州・南海、湖南省の益陽・湘潭・長沙、湖北省の夏口・沔陽、福建省の福州が著名だったという<sup>(注4)</sup>。

これに対して、『中国実業誌（江蘇省）』（1933年）では、著名な傘の生産地は湖南・湖北・安徽・浙江・江蘇などの諸省だったとしており<sup>(注5)</sup>、紙傘の主要な生産地に多少の差異が見られるが、いずれにせよ、紙傘の生産地が華中にやや集中していたことがわかる。

紙傘の主要な材料のうち、紙について見てみると、福建省では同省内で生産された白桑皮紙、広東省では同省内で生産された上等棉紙と省外から移入された白桑皮紙、湖南省では同省内で生産された上等牛皮紙と近隣の省や湖南省内の近隣の県で生産された桑皮紙、浙江省では同省内で生産された白桑皮紙などの土紙が用いられていた<sup>(注6)</sup>。ただし、江蘇省では皮紙が用いられたとするのみで、その詳細は不明である<sup>(注7)</sup>。このように、一般的には紙傘の材料の紙はおもに地元で生産された土紙が用いられることが多く、皮紙の生産が盛んだった省では紙傘の生産も盛んだった。

紙傘の7つの製造工程のうち、最も多くの時間を要するのが、傘骨（竹骨）の作成と傘紙の糊付けでお

のおの60分を要し、ついで傘紙に油を塗る作業が30分を要し、また、「穿髪繩」（ひもをとおして固定する）以外の各工程の労働者は全て男子で、その賃金（月給）は技能によって10元から20元までと異なっていた<sup>(注8)</sup>。

1925年の資料によると、中国の傘は、油紙で作られ、雨傘と日傘に分けられるが、かつては雨傘を日傘にも代用したり、日よけではわら帽子（草帽）を用いたりしていたので、両者には区別がなかった。また、土紙は非常に丈夫な上に、紙傘に塗る油をよく吸収したので、紙傘は絹や布の傘に比べて防水性が高かった。しかも、紙傘は主要な材料が紙と竹だったので、軽くて携帯するのに便利だった。そして、布傘が1本1元、絹製の日傘が1本2～5元だったのに対して、紙傘は1本0.3～0.5元と非常に安価だった<sup>(注9)</sup>。

なお、『中国実業誌（浙江省）』（1933年）によれば、中国の傘は紙傘・油布傘・洋傘の3種類に分類することができるとしている<sup>(注10)</sup>。

### 2) 統計から見た生産動向

現在において利用可能な統計資料からは、1912～21年・1920年代末・1930年代前半における中国各省の紙傘ないし傘の生産動向を部分的に知ることができるのみである。

まず、1912～21年における雨傘（紙傘）の生産動向について、表1および表2を見てみると、1913年における中国全体の生産総額が突出しているのは華南の広西省における生産額が突出していることに主要な原因を求めることができる。だが、広西省における1913年の統計数値は1913年以外の数値から見て誤りであると考えられる。そこで、1913年を除くと、1912年より雨傘の生産量が多かったのは1915年と1917年で、それ以外の年は1912年を下回っており、1920年には1912年は1912年の4分の1以下になっている。ただし、統計それ自体に不備があった（全国を掌握した網羅的な調査を実施することができなかった）ことを考慮すると、必ずしも全体的な傾向として生産額が年々減少していったとは断定することはできない。

そして、再び表2を見てみると、浙江・江西・江蘇の3省は跛行的ながら増加しており、とりわけ1914年からは浙江省が首位を占めるようになり、これに1912年に首位を占めていた湖南省がつぎ、さらに、

表1 1912～20年中国における雨傘の生産額.

Table 1 Production of umbrellas in China, 1912-20.

年度	生産額合計(元)
1912	2,061,419
1913	6,727,084
1914	1,834,501
1915	2,314,247
1916	1,488,223
1917	2,445,398
1918	1,895,883
1919	1,481,105
1920	492,025

典拠) 農商部総務庁統計科編纂『中華民国元年・第一次農商統計表』上巻(上海中華書局, 1914年3月), 同『中華民国2年・第二次農商統計表』(1915年6月), 同『中華民国3年・第三次農商統計表』(1916年12月), 同『中華民国4年・第四次農商統計表』(1917年12月), 同『中華民国5年・第五次農商統計表』(1919年2月), 同『中華民国6年・第六次農商統計表』(1920年8月), 同『中華民国7年・第七次農商統計表』(1922年2月), 同『中華民国8年・第八次農商統計表』(1923年5月), 同『中華民国9年・第九次農商統計表附十次農商統計表』(1924年6月)より作成。

表2 1912～21年中国各省における雨傘の生産額(単位:元).

Table 2 Production of umbrellas in Provinces, 1912-21.

年度	湖南省	広東省	広西省	浙江省	江西省	江蘇省	湖北省	四川省
1912	456,982	387,499	16,520	359,092	162,844	156,016	150,977	113,304
1913	433,009	110,862	4,337,075	427,792	209,834	230,509	515,299	143,780
1914	302,612	108,617	11,320	639,165	26,906	170,683	209,912	135,682
1915	506,562	194,287	48,269	648,199	219,852	221,219	221,800	—
1916	127,820	—	39,092	342,596	220,815	256,564	224,774	—
1917	397,581	207,471	—	739,333	347,570	226,062	209,846	—
1918	—	—	—	740,594	347,578	265,028	215,687	—
1919	—	—	—	759,097	—	257,478	—	—
1920	—	—	—	—	—	286,574	—	—
1921	—	—	—	—	—	295,297	—	—

典拠) 表1に同じ。ただし、「—」は不明であることを示している(以下, 同様)。

これに広東省や華中の江西省・江蘇省・湖北省などがついでいたことがわかる。

次に, 1920年代末における著名な紙傘の生産地について, 表3を見てみると, 各省における紙傘の生産量が1912～21年に比して激減している。これが省全体ではなく, 紙傘の生産で著名な一部の地域における状況を表しているにすぎないことは明白だが, 1920年代末に紙傘の生産量が最も多かったのは約35万本を生産していた広東省で, これにその5割強にあたる18万本以上を生産していた浙江省がついでおり,

さらに, その半分ほどにあたる9.45万本を生産していた湖北省と9万本以上を生産していた江蘇省がついでいた。

生産額のみしか知ることのできない表1および表2と生産量のみしか知ることのできない表3を単純に比較することはできないが, この比較からは, 雨傘の生産の首位は1910年代から1920年代にかけて浙江省から広東省へ移行したことが確認できる。

ちなみに, 前掲の1925年の資料に記されていたように, 紙傘1本の価格を0.3～0.5元として表2から計算

してみると、1919年には浙江省で約170万本～約250万本が生産されていたことになり、また、1917年に広東省で約40万本～約70万本が生産されていたことになる。

さらに、表4は、1930年代前半中国における傘の生産状況に関する統計であるが、杭州の傘は大部分が紙傘だったものの、傘を製造する作業場の軒数が最も多かった福州の傘は紙傘のみの生産なのか、ある

いは、布傘の生産も含んでいるのかは不明であり、上海・武進・金山における傘の生産については労働者数・資本額・年間生産額が全くわからない。

また、表5を見てみると、1930年代前半には、華中に位置する浙江・江蘇・湖南の3省が傘の主要な生産地となっており、生産量では浙江省が圧倒的な首位を占め、これに湖南省と江蘇省がつぎ、この3省における生産量が中国全体の大部分を占めていたことが

表3 1920年代末における紙傘の生産量。

Table 3 Production of paper-umbrellas late in 1920s.

	県名	軒数	生産量
江蘇省	鎮江	2	9万本以上
浙江省	杭県	4	12万本以上
	温州	2	6万本以上
	小計	6	18万本以上
広東省	広州	1	約15万本
	南海	1	20万本
	小計	2	約35万本
湖南省	湘潭	1	2万本
	長沙	1	2万本
	小計	2	4万本
湖北省	夏口	2	3.5万本
	沔陽	4	5.95万本
	小計	6	9.45万本
福建省	福州	3	10.5万本以上

典拠)「中国紙傘之製造及出口」(『工商半月刊』第1巻第18期, 1929年9月15日調査)1～3頁より作成。

表4 1930年代前半における傘の生産。

Table 4 Production of umbrellas in the first half of 1930s.

	生産品	軒数	労働者数[1軒当たり](人)	資本額(元)	年生産額(元)
福州	—	91	—	86,400	290,100
杭州	布傘	5	44[8.8]	5,700	68,300
	紙傘	69	285[4.1]	26,380	151,990
	小計	74	329[4.4]	32,080	220,290
上海	綢布陽傘・男女陽傘	8	—	—	—
	紙傘	33	—	—	—
	小計	41	—	—	—
武進	各種紙傘	13	—	—	—
金山	綢布陽傘	8	—	—	—

典拠)『中国経済年鑑』(商務印書館, 1934年)第11章840～845頁より作成。ただし、福州の傘の材料の中には紙と綢布が含まれていると説明されていることから、紙傘と布傘の両方が生産されていたと考えられる。また、同書の調査時期は1932年から1933年上半年期までと説明されている。

表5 1930年代前半各省における傘の生産。

Table 5 Production of umbrellas in provinces, the first half of 1930s.

省名	軒数	労働者数[1軒当たり](人)	資本額(元)	年間生産量(本)
浙江	263	1,553 [5.9]	88,600	570,950
江蘇	147	724 [4.9]	46,670	253,900
湖南	216	1,170 [5.4]	28,460	325,720
河南	17	97 [5.7]	4,340	25,580
福建	24	138 [5.7]	3,830	46,000
広東	24	207 [8.6]	4,100	39,800
江西	12	42 [3.5]	2,400	25,410
山東	4	22 [5.5]	400	1,400
合計	707	3,685 [5.2]	178,800	1,288,760

典拠)『中国経済年鑑』続編第12章(商務印書館, 1935年)224~226頁より作成。なお、同書の調査は1933年7月~1934年6月に行われている。

わかる。しかも、このような趨勢は1912~21年とそれほど大きく変化していない(表2)。また、作業場1軒当たりの労働者数は各省ともおおむね5人程度で、広東省の8.6人と江西省の3.5人を除くと、各省間に際立った差は見られない。

1929年に発生した世界経済恐慌が1931年からは中国にも波及したことから、1920年代末よりも1930年代前半には傘の生産が減少していると考えられる。よって、表5と比較してみると、表3と表4は一部分しか取り上げていないことがわかる。

### 3) 小 結

1912~21年、1920年代末、1930年代前半における紙傘の生産に関する統計資料は不完全なもので、全体を網羅したものではなかったことがわかるが、近代においていわゆる洋傘が流入したことによって紙傘の生産が急速に衰退していったというよりも、むしろ近代以降も紙傘の生産は根強く存続していたと見なすことができる。

また、文献資料と付き合わせて見てみると、紙傘の中心的な生産地は江蘇・浙江・安徽・湖北・湖南・江西などの華中諸省であり、これに広東や福建などの華南諸省がついでいた。これらの地域はすでに拙稿で論じたように<sup>(註11)</sup>、手工製紙(土紙)の生産も盛んなところだった。これは、紙傘の主要な材料は傘紙になる土紙と傘骨になる竹であり、土紙の主要な原料は竹だったことと関連していた。

### Ⅲ. 各省における生産動向

ここでは、文献資料が多い順に、各省における紙傘の生産動向をみておきたい。

#### 1) 浙江省

1920年代末の資料によると、浙江省内では杭州と温州において生産された紙傘が著名だったという<sup>(註12)</sup>。

また、『中国実業誌(浙江省)』(1933年)によれば、浙江省における紙傘の中心的な生産地は温州・杭州・寧波であり、すでに清代中葉には紙傘店は温州に30軒余り、杭州に20軒余り、寧波に10軒余り、その他の県におのおの3軒内外あったが、清末になると、温州・杭州・寧波の紙傘店は日増しに増加して輸出するようになり、国内ではおもに江蘇省や浙江省の各地に販売され、さらに、華北の天津や東北の牛莊・營口などにも販売されたという。そして、1919年に日本人の商人が温州で紙傘を買い付けて日本の門司・長崎や朝鮮で販売するようになってから、年々、温州の紙傘は日本における販路を拡大していき、1924~25年頃には日本市場においてかなりの地位を占めるようになったという。ところが、1926年から日本で国産品愛用が提唱されて温州の紙傘が排斥され、また、同じ頃に欧州の熱帯各地で中国の紙傘は傘紙に塗った油が熱で溶けてねばねばする「油粘之弊」が発生して売れなくなってしまった。そこで、温州と杭州の紙傘は1927年に改良が加えられると、生産が回復し、その後、傘店は温州では100軒余り、

杭州では50軒余りに増加した<sup>(注13)</sup>。

表6から浙江省における紙傘の生産について見てみると、1932年には永嘉県が軒数・労働者数・資本額・生産額のいずれにおいても圧倒的に多く、生産額においてこれにつぐ杭県（現在は杭州市区に属する）や鄞県（現在は寧波市区に属する）をはるかにしのいでいた。また、生産総額では、1919年の約76万元（表2）をはるかにしのぐ102万余元となっていた。

ところが、表7から1933年7月～1934年6月における浙江省産の紙傘に関する調査の結果を見てみると、永嘉県は統計資料上には見られず、紙傘の生産量が最も多かったのは22万本を生産していた黄巖県となっており（表6には見られない）、これにその約半分の12万本を生産していた杭県と鄞県がついでおり、以上の3県が14,400本を生産していた第4位の武義県と12,000本を生産していた第5位の富陽県などをはるかにしのいでおり、また、仕事場の軒数でも黄巖県が最も多く、これに杭県と鄞県がついでいた。だ

が、労働者数では杭県が最も多く、これに杭県の半分以下の黄巖県がつぎ、さらに杭県の約4分の1の鄞県が続いていた。また、資本額では鄞県が最も多く、これに杭県がつぎ、黄巖県は鄞県の20分の1以下にとどまっていた。

しかも、表7は生産量において全体を網羅していないので、生産総量は実際よりも少なく表記されていると考えられるが、1920年代末の18万本以上（表3）をはるかにしのぐ57万本余りとなっている。また、仕事場の総軒数が前年の373軒（表6）よりも少ない263軒となっているのは、やはり永嘉軒の統計数値が漏れているからであろう。

以上の点を考慮すると、1933～34年頃における浙江省の紙傘の生産量は表7に表されているよりもかなり多かったと推測することができる。なお、表7は紙傘の単価を0.35～0.75元としているが、これは1925年の資料が示す0.3～0.5元より高く、物価の上昇を反映していると言える。

以下に、浙江省の中でも紙傘の生産地として著名

表6 1932年における浙江省の紙傘生産。

Table 6 Production of paper-umbrellas in Zhejiang Province, 1932.

県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産額(元)
永嘉	107	531	55,400	779,511
杭県	35	—	—	101,600
鄞県	13	—	—	35,000
蘭谿	7	—	2,800	12,500
金華	15	40	6,600	19,300
龍游	1	—	200	700
衢県	1	—	700	1,500
瑞安	8	—	4,300	10,900
平陽	11	—	5,700	19,000
樂清	1	—	400	1,200
玉環	3	—	800	4,000
諸暨	1	8	600	4,500
新登	2	—	600	2,600
長興	3	8	500	1,340
富陽	3	14	2,400	3,200
桐廬	—	—	—	2,000
浦江	—	—	—	21,600
合計	373	—	—	1,020,451

典拠)『中国実業誌(浙江省)』第7編419～425頁・432頁より作成。ただし、蘭谿の資本額は6軒分のみで、金華の労働者数は5軒分のみである。

表7 1933年7月～1934年6月における浙江省の製傘業。

Table 7 Producers of umbrellas in Zhejiang Province, 1933.7-1934.6.

県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年生産量(本)	単価(元)
杭県	53	590	26,500	紙傘	120,000	—
富陽	4	20	1,200	紙傘	12,000	0.48
余杭	6	42	5,000	紙傘	5,000	—
昌化	2	9	300	紙傘	—	0.40
安吉	3	16	370	紙傘	1,600	0.50
孝豊	4	20	400	紙傘	—	0.55
鄞県	28	148	30,180	雨傘, 日傘	120,000	—
紹興	20	64	1,000	紙傘, 油布傘	10,000	—
黄巖	70	270	1,400	雨傘	220,000	0.50
衢県	10	45	800	雨傘	6,000	—
江山	10	65	2,000	紙傘	—	—
蘭谿	4	20	1,200	紙傘	2,000	0.40
永康	11	55	4,400	紙傘	3,630	0.48
武義	6	54	3,000	紙傘	14,400	0.75
青田	1	4	300	紙傘	5,000	0.50
松陽	1	2	300	紙傘	720	0.50
遂昌	5	15	250	紙傘	—	0.35
樂清	5	25	10,000	紙傘	600	0.60
泰順	20	89	—	紙傘	50,000	0.50
合計	263	1,553	—	—	570,950	—

典拠)『中国経済年鑑』続編(商務印書館, 1935年)225頁より作成。

で関連資料のある永嘉県と杭州の状況を見てみたい。

『支那省別全誌(浙江省)』(1919年)によれば、温州における紙傘の生産量は約60万本に達し、その労働者は約1,000人いたという<sup>(注14)</sup>。浙江省では温州の永嘉県において生産された紙傘の販路が最も広く、国内ではおもに上海・寧波・蘇州・南京・広州・牛莊・天津・營口などに販売され、一方、国外では日本・東南アジア・欧米各国に販売された。また、杭州の紙傘はおもに紹興・上海・蘇州・無錫などに販売され、国外では東南アジアにわずかに販売されただけだった。さらに、寧波市に隣接する鄞県において生産された紙傘はおもに寧波で販売されたが、上海にも販売されていた<sup>(注15)</sup>。

明清時代には温州・福州・仏山の紙傘は有名で、清代中葉に温州府永嘉県城区の傘店が生産した紙傘は温州府や処州府の各県に販売され、1877年に始めて輸出された。民国初期には永嘉県城区に製傘業従

事者が200～300人いて年間約150万本の紙傘を生産していた。そして、1931年には永嘉・平陽・瑞安の3県を主要な生産地とする温州の紙傘生産は最盛期をむかえ、作業場が107軒、労働者が200人余りとなった。だが、抗日戦争期は製傘業も衰退し、1942年には生産量が50万本まで減少し、抗日戦争終結後には好転したとは言え、1948年には生産量が30万本となってしまった<sup>(注16)</sup>。

1934年頃に報じられた別の報告によれば、永嘉県では、紙傘の年間生産額が100万元に達しており、国内や東南アジアばかりでなく、日本やアメリカにも販売されていた。紙傘の材料の土紙は、南屏・粗紙・九張皮の3つに大別され、その多くは永嘉県の第4区～第7区で生産されていた。このうち、南屏は南通などの江北の各県へ、粗紙と九張皮は長江流域や福建省福州へ売られ、これらの紙の年間生産額は40万元余りに達していた<sup>(注17)</sup>。



ところが、1930年代半ば頃になると、紙傘の材料として土紙の棉皮紙が用いられなくなり、これに代わって輸入された機械製の牛皮紙が用いられるようになったために、永嘉県における紙傘の生産量も減少した。そもそも、棉皮紙を生産する作業場は、旧温州府に属する永嘉県ばかりではなく、瑞安県と泰順県に45ヶ所、旧処州府に属する青田県・彭峽・高崗・小溪に20ヶ所、景寧県銀村坑底に30ヶ所余り、松陽県と遂昌県におのおの10ヶ所余りあった。山棉皮を採取する農民や商店など、直接的ないし間接的にこれによって生計を立てていた者は合わせて2万人以上に達し、年間生産額は100万元余りに達していた。そして、その棉皮紙の大半は永嘉県において生産される紙傘の材料として提供されていた。だが、1930年代初め頃、永嘉県では傘店が次々とその材料として洋紙を使うようになったために、1担当りの棉皮紙の販売価格が38元から14元に急落し、しかも、棉皮紙の生産者が作業の手を抜き、材料をごまかして製造し、出荷量が急に増加したため、供給が需要を上回り、価格が一層下落し、製傘業は「傘荘」（傘店）に操縦されるようになり、生産額は減少してしまった<sup>(注18)</sup>。

以上のような棉皮紙および紙傘の生産の危機的状況に接し、永嘉県では1934年に傘業職工会・棉皮紙業界・傘商人の3者が合同で保証責任紙傘生産合作社を組織したが、うまくいかなかったため、永嘉県政府は3者からそれぞれ代表者を召集し、棉皮紙で傘を製造して機械製の牛皮紙を取り締まることで合意した。こうして、永嘉県政府の監督下に検査処が組織され、弁法章則が制定された<sup>(注19)</sup>。

永嘉県の紙傘の材料に輸入機械製紙（洋紙）の牛皮紙がどれくらいの割合で用いられていたのか、また、永嘉県政府が牛皮紙に対する取り締まりを決定した後、棉紙や紙傘の生産がいかなる状況になったのかなどについては明らかではない。ただし、洋紙（牛皮紙）の流入が土紙（棉皮紙）を完全に駆逐していったわけではなく、逆に、永嘉県政府が洋紙を排除して土紙を保護しようとしたことがわかる。

一方、1929年の調査によれば、温州の紙傘が専ら日本へ輸出されていたのに対して、杭州の紙傘は年間生産量が10万本以上で、国内の他に東南アジアや欧米へも販売されていたという。また、杭州の紙傘は漆傘と小花傘に大別され、漆傘は文明傘とも呼ば

れて改良を加えられたもので、小花傘は女傘で、短小で精緻なものだった。杭州の紙傘商店は100軒を下らなかったが、作業場を設けて紙傘を作っていたのは40軒余りにすぎなかった。なお、杭州における製傘業の中心は武林門から湖墅に至る一帯だったという<sup>(注20)</sup>。

また、1934年の資料によれば、杭州には改良紙傘の製造場が28軒あり、年間の生産額が30～40万元となっており、長江以南の各省や北京・天津あるいは東南アジアの他に、3～4年前までは日本や欧米などにも販売していたが、旧来の紙傘の輸出が杜絶しつつあったので、日本製を模倣した改良紙傘が生産されるようになったという<sup>(注21)</sup>。

なお、杭州市に隣接する余杭県では、檉樹の皮で作られた桃花紙を用いて紙傘を製造していたが、桃花紙は、光沢があり、滑らかで、しかも、色が白く、細やかで、丈夫だったため、桃花紙で作られた傘は、長時間、強い日光に晒されても、丈夫で破れなかった。余杭県の紙傘は、浙江省の杭州・嘉興・湖州や江蘇省南京などに販売された<sup>(注22)</sup>。

## 2) 江蘇省

ここでは、当該時期の統計資料上での取り扱いに合わせて、江蘇省に上海市を含めて分析していくことにしたい。

1920年代末の資料では、蘇北の高郵と蘇南の鎮江で生産される紙傘が著名だったと記しているが、その詳細は不明である<sup>(注23)</sup>。また、『中国実業誌（江蘇省）』（1933年）では、江蘇省の製傘業の中心は蘇南の武進と上海で、その他に蘇南の鎮江・丹陽・宜興・溧陽・無錫・常熟・江陰および蘇北の泰興などの県でも2～10軒あまりの傘製造の作業場があったと記している<sup>(注24)</sup>。

ところが、表8を見てみると、1930年代前半には鎮江の製傘業が取り上げられておらず（表3を見てみると、1920年代末には取り上げられている）、江蘇省の中で傘の生産量が最も多かったのは蘇北の江都で、これに蘇南の呉県・昆山・無錫・呉江がついでおり、また、労働者数が最も多かったのは呉県で、これに上海市の奉賢、蘇南の昆山・無錫、蘇北の江都・高郵などがついでいた。なお、作業場の軒数と労働者が最も多かった呉県は、製傘業の総資本額も圧倒的に多く、紙傘の単価も昆山について高かった。

なお、別の資料では1931年における江蘇省の傘製造業について、合計で200軒余りの作業場があり、そのうち武進県が最多の84軒、ついで上海が41軒となっていたが<sup>(注25)</sup>、江蘇省武進県志編纂委員会編『武進県志』（上海人民出版社、1988年）には紙傘に関する記載が全くない。ただし、溧陽県城内には1936年に11軒の紙傘生産の作業場があり、44万本余りの紙傘を生産し、1947年には紙傘生産の作業場は20軒に増加した<sup>(注26)</sup>。

また、鎮江には清末に張森泰などの紙傘生産の作業場があり、その後設立された曹裕興製傘廠には労働者が約400人いて年間15万本の紙傘を生産して上海・九江・海州などに販売していた。抗日戦争が勃発すると、これらの作業場は閉鎖されたが、抗日戦争終結後に復興して、1949年には10軒余りの作業場があった<sup>(注27)</sup>。

以上のように、江蘇省においても統計上に現れているよりも多くの紙傘が生産されていたと考えられ

る。

さて、表9を見てみると、江蘇省では1931年には綿布や絹を用いた布傘もかなり生産されていたことがわかる。とりわけ、布傘の単価は紙傘の6～9倍となっていたので、生産量では紙傘がかなりの割合を占めていたが、生産額では布傘が圧倒的な割合を占めていた。

### 3) 湖南省

1920年代末の資料では、湖南省内の益陽・湘潭・長沙で生産されていた紙傘が著名だったとしている<sup>(注28)</sup>。

ところが、表10を見てみると、1930年代前半の湖南省では紙傘の生産に関する作業場軒数・労働者数・資本総額・年間生産量の全てにおいて長沙が最も多かったが、益陽と湘潭が取り上げられておらず、紙傘の生産地として取り上げられている15県のうち、生産量では長沙と常德の占める割合が高く、作業場

表8 1930年代前半における江蘇省の製傘業。

Table 8 Producers of umbrellas in Jiangsu Province, the first half of 1930s.

県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年間生産量(本)	単価(元)
崇明	2	4	200	紙傘	6,000	0.50
海門	1	2	200	紙傘	1,400	0.30
丹陽	9	52	100	紙傘	—	—
松江	7	37	1,850	紙傘	6,450	—
南匯	3	30	1,500	紙傘	10,000	0.35
奉賢	14 <sup>③</sup>	70 <sup>②</sup>	1,200	紙傘	7,200	0.41
川沙	2	9	500	紙傘	8,500	0.48
嘉定	3	14	500	紙傘	5,300	0.50
呉江	10 <sup>⑤</sup>	51	1,490	紙傘, 油布傘	16,450 <sup>⑤</sup>	0.50
靖江	3	8	300	雨傘	6,400	—
如皋	3	9	60	雨傘	1,200	—
江都	18 <sup>②</sup>	63 <sup>④</sup>	1,300	日傘, 雨傘	73,600 <sup>①</sup>	—
高郵	12 <sup>④</sup>	60 <sup>⑤</sup>	4,200	雨傘	—	0.40
江浦	3	9	150	紙傘	2,200	—
青浦	3	5	170	紙傘	—	0.35
呉県	41 <sup>①</sup>	175 <sup>①</sup>	22,700	紙傘	42,500 <sup>②</sup>	0.60
昆山	8	66 <sup>③</sup>	4,000	紙傘	38,700 <sup>③</sup>	0.75
無錫	5	60 <sup>⑤</sup>	6,250	紙傘	28,000 <sup>④</sup>	—
合計	147	724	46,670	—	253,900	—

典拠)『中国経済年鑑』続編(商務印書館、1935年)224～225頁より作成。表中の①②③などは順位を表している(以下、同様)。

表9 1931年江蘇省における傘の生産.

Table 9 Production of umbrellas in Jiangsu Province, 1931.

	生産量(本)	生産額(元)	単価(元)
雨傘	80,000	15,000	0.2
愛国傘	50,000	15,000	0.3
紙陽傘	25,000	6,250	0.25
緞・布の陽傘	99,000	133,650	1.35
紙製の子供・女性用傘	18,000	7,200	0.4
網布製の子供・女性用傘	66,000	125,400	1.9
その他	10,000	3,000	0.3
合計	348,000	306,500	—

典拠『中国実業誌（江蘇省）』第8編956頁より作成。

表10 1930年前半湖南省製傘業一覧表.

Table 10 Producers of umbrellas in Hunan Province, the first half of 1930s.

県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年間生産量(本)	単価(元)
長沙	55①	386①	8,000①	美術傘, 紙傘	135,000①	—
常德	8	46	3,000	紙傘	100,000②	0.40
安化	35②	247②	3,500	紙傘	3,600	0.50
岳陽	6	22	400	紙傘	15,000	0.50
平江	30③	112③	4,000②	紙傘	28,000③	0.67
望湘	10	50	500	紙傘	10,000	0.40
寧郷	6	18	900	紙傘	3,600	0.40
湘郷	14	84	1,650	紙傘	7,500	0.40
瀏浦	5	14	400	紙傘	—	—
永興	4	24	550	紙傘	2,500	0.40
衡山	6	24	200	紙傘	—	—
安化	14	49	3,900③	紙傘	7,240	0.80
桂陽	7	24	210	紙傘	1,280	0.40
東安	8	31	250	紙傘	—	0.25
郴県	8	39	1,000	紙傘	12,000	0.65

典拠『中国経済年鑑』続編（商務印書館，1935年）第12章，226頁より作成。なお，表中には安化県が2カ所記載されており，どちらかの県名が誤りである。

軒数と労働者数では安化と平江が長沙についていた。

1930年代前半に湖南省で布傘を製造していたのは醴陵県だけで，同県内には1920年以降に11軒の作業場が設立され，資本総額は4,410元，労働者数は34人，生産量は16,600本，生産額は19,920元だった<sup>(注29)</sup>。

このように，湖南省では，浙江省や江蘇省とは異なって，1930年代になっても傘の生産は依然として紙傘が大きな割合を占めていたが，紙傘の生産量は統計上表れているよりも多かったと考えられる。

一方，表11を見てみると，紙傘生産の作業場の軒数では衡陽・湘潭・瀏陽などが多かったが，資本額・労働者数・生産量・生産額ではやはり長沙が最も多く，生産額ではこれに湘潭・衡陽・瀏陽などがついてきた。ただし，表11では益陽が取り上げられていないので，やはり全体を網羅したものとは言えない。

民国期の湖南省では，長沙・湘潭・衡陽・瀏陽・湘郷の5県において紙傘の生産が盛んだったが，清朝中期には常德・湘陰・安化・岳陽・平江・郴州・桂

表11 1930年代前半における湖南省各県の紙傘生産動向.

Table 11 Production of paper-umbrellas in the county of Hunan Province, the first half of 1930s.

県名	軒数	資本額(元)	労働者数(人)	生産量(本)	生産額(元)
長沙	8	21,900	123	192,000	91,200
湘潭	28	17,800	96	83,300	26,200
衡陽	31	3,130	106	91,500	22,835
瀏陽	20	3,840	92	54,600	10,920
湘郷	14	14,600	54	105,000	21,000
常德	6	2,600	12	10,000	4,000
湘陰	3	2,900	5	1,500	600
醴陵	1	250	2	1,200	480
安化	4	2,240	13	5,580	1,640
岳陽	4	1,040	7	3,450	1,275
平江	15	830	25	13,200	3,960
耒陽	3	640	7	4,500	1,250
郴県	7	1,485	23	27,710	6,313
桂陽	8	185	—	2,470	1,109
芷江	10	1,220	—	31,670	9,504
靖県	7	2,430	—	9,100	3,300
合計	169	77,090	565	636,780	205,586

典拠)『中国実業誌 (湖南省)』第7編376～377頁より作成。

陽・芷江・靖県などにおいても紙傘が生産されていたが、民国期になって衰退したという<sup>(注30)</sup>。

また、各県志にはそれぞれの県における製紙業の状況が記載されているので、以下にそれを順に紹介しておきたい。

常德県城内における製傘業は清末に始まり、1911年には15軒の傘店があり、解放前にも6軒の傘店があった<sup>(注31)</sup>。

寧郷県では、1840年、楊林橋に「張恒順」傘店が開設され、草冲皮紙を用いて油紙傘を製造し、年間5,000本余りの紙傘を長沙や湘潭などに販売し、1914年に南京手工業産品比賽会で第1位になると、同県内においては紙傘の生産が盛んになった<sup>(注32)</sup>。

平江県では、清代中葉には30軒余りの作業場を備えた傘店があり、生産量は湖南省内で第4位だった。1912年には全県で10軒だった紙傘の作業場は1934年には15軒に増加し、25人の労働者が1.32万本の紙傘を生産していた<sup>(注33)</sup>。

湘潭県では、1843年に山藺の陳祥泰が紙傘工場を開設し、傘の骨(軸)の柄となるのは竹だったが、竹の豊富な近隣の農村で農閑期に傘の骨が生産されて工場へ提供した。1927年には、製傘業者が60軒、従

業者が300人余り、生産量が6万本に達した。さらに、1936年には、製傘業者が300軒余り、従業者が1,500人余り、生産量が80万本にまで増加したが、1944年に県城が陥落すると、紙傘の生産はほぼ完全に停止してしまった。抗日戦争後、生産が徐々に回復し、1949年には74.6万本の紙傘が生産されるまでになった<sup>(注34)</sup>。

衡陽城区では、1886～1911年に20軒の紙傘の作業場があり、85人が紙傘の製造に従事し、湖南省各県・広東省北部・広西省北部などに販売していた。民国期には作業場が70軒余りに増加し、紙傘の年間生産量も17万本に達した<sup>(注35)</sup>。

湘潭県では、清朝乾隆年間(1736～95年)に歇馬・青山橋一帯で紙傘の生産が盛んになり、後に県城内でも製傘業が発展するようになった。こうして、1906年には10万本近くの紙傘が生産され、さらに、1935年には県城内だけでも28県の作業場があり、8.33万本の紙傘が生産され、中国各地に販売されただけでなく、日本・ミャンマー・マレーシア・タイ・シンガポールなどにも輸出された。だが、1944年に湘潭県が日本軍に占領されると、県城内にあった紙傘の作業場も操業を停止し、抗日戦争終結後に徐々に

復興していった<sup>(注36)</sup>。

瀏陽県城内には、1890年代に10軒の紙傘の作業場があり、いくつかの鎮にも製傘業が波及し、140人余りの労働者が年間7万本余りの紙傘を生産していた。さらに、1910年には県内各地で製傘業が発展し、310人余りの労働者が22万本余りの紙傘を生産し、江西・河南・山西・河北などの各省に販売した。ただし、1933～49年には販路が大幅に縮小した<sup>(注37)</sup>。

#### 4) その他の省

浙江省・江蘇省・湖南省について資料が多いのが華南の広東省と福建省である。1920年代末の資料によると、広東省では広州と南海で生産される紙傘が著名だったとしている<sup>(注38)</sup>。また、仏山市近郊農村では清末に紙傘の生産が発展し、1925年に市街地へも普及し、1930年頃に最盛期をむかえ、作業場が170軒余り、労働者数が4,000人余り、日産1.2万本に達し、インドネシア・シンガポール・ベトナム・タイなどの東南アジアへも販売されていたが、抗日戦争期には日本の紙傘が大量に輸入されて仏山の紙傘の販売は杜絶し、作業場はことごとく停業したものの、抗日戦争後に生産が回復し、1949年には作業場が220軒余り、労働者数が3,000人余り、日産1万本に達した<sup>(注39)</sup>。

ところが、表12を見てみると、1930年代前半の広東省における製傘業については龍川と和平の2県のみの状況しか知ることができない。この両県は上掲の仏山県と比較すると、軒数・労働者数・生産量の全てにおいてかなり少なく、この統計資料が極めて不十分な内容であることがわかる。

また、福建省では、1920年代末の資料によると、福建省内の福州の紙傘が著名だったとしているが<sup>(注40)</sup>、表12を見てみると、太田・浦城・福鼎・松溪の4県のみで、福州の記述はなく、新編の福州市志にも紙傘に関する記載はない。浦城県には、紙傘を生産する家が1925年に10戸ほどあったが、1946年には7戸に減少した。しかも、繁忙期には家で傘を作ったが、オフシーズンには家々を回って雨傘の補修をした<sup>(注41)</sup>。あるいは、大田県では、1926年に閩侯出身の林長連が城門外に「林吉利」雨傘店を開設し、年間2,000本の紙傘を生産したという<sup>(注42)</sup>。

さらに、表13を見てみると、江西省では靖安と浮梁の2県のみの状況しか知ることができない。このうち、靖安県では1935年に県城に4軒の雨傘店があり、従業員20人が油紙傘を生産したが、その生産量は多くなかったという<sup>(注43)</sup>。

河南省と山東省の状況を示している表14を見てみると、華北では河南省6県と山東省1県の1930年代前

表12 1930年代前半における華南の製傘業。

Table 12 Producers of umbrellas in South China, the first half of 1930s.

	県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年間生産量(本)	単価(元)
広東	龍川	8	34	1,600	紙傘	6,400	0.60
	和平	16	173	2,500	紙傘	33,400	0.50
福建	太田	2	10	400	紙傘	—	0.80
	浦城	15	75	3,000	紙傘	45,000	—
	福鼎	5	48	300	紙傘	—	0.50
	松溪	2	5	130	紙傘	1,000	—

典拠)『中国経済年鑑』続編(商務印書館, 1935年)第12章, 226頁より作成

表13 江西省製傘業一覧表。

Table 13 Producers of umbrellas in Jiangxi Province.

県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年生産量(本)	単価(元)
靖安	5	35	1,000	紙傘	24,500	0.65
浮梁	7	7	1,400	紙傘	910	0.40

典拠)『中国経済年鑑』続編(商務印書館, 1935年)第12章, 225～226頁より作成。

表14 1930年代前半における華北の製傘業。

Table 14 Producers of umbrellas in North China, the first half of 1930s.

省名	県名	軒数	労働者数(人)	資本額(元)	生産品	年生産量(本)	単価(元)
河南	禹県	2	9	120	布傘	5,000	0.70
	商水	2	8	500	布傘	3,960	1.50
	博愛	4	26	1,200	紙傘, 布傘	7,000	—
	新鄭	3	18	600	布傘	2,020	1.20
	許昌	4	28	1,400	布傘	6,000	1.00
	内郷	2	8	520	紙傘, 布傘	1,600	1.20
山東	曹県	4	22	400	布傘	1,400	1.50

典拠)『中国経済年鑑』続編(商務印書館, 1935年)第12章, 226頁より作成。

半における状況の一端を示す統計資料があるのみである。しかも、生産されていた傘のほとんど大部分は布傘だった。

#### IV. おわりに

近代中国における製傘業に関する統計資料は不備であり、また、文献資料も断片的ないし部分的に言及するにとどまっており、資料から全体像を把握することは難しい。だが、中国では近代においても在来産業が手工業の形態を維持しながらも、その製品に改良を加えて根強く存続し、あるいは、新たに発展していたことを紙傘製造業において確認することができた。

紙傘の主要な材料は、竹を原料とする土紙と竹の柄だったので、紙傘は土紙の主要な生産地において盛んに生産された。土紙は、その原料となる竹の豊富な山間部の農村で農民が副業として生産されることが多かったが、紙傘は県城や鎮などで生産されていたことから、紙傘の生産者は、農民ではなく、都市部の賃金労働者だった。また、傘の販売店が併設した作業場に数人の労働者を雇用して傘を生産している場合が多かった。この点において、土紙が山間部の農民による家内手工業だったのとは差異が見られるが、これは必ずしも発展段階の差異を反映しているとは言い切れない<sup>(註44)</sup>。

今後は、紙傘以外の土紙を材料とする扇子などの紙関連製品についても考察し、紙傘との異同について検討してみたい。

#### 注

- (1) 近代中国全体における在来紙業の動向については、拙稿「近代中国における在来製紙業の展開」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所『地域総合研究』第34巻第1号, 2007年9月)、また、主要な省ごとにおける近代土紙業の動向については、拙稿「近代浙江省における手工製紙業の展開」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第39号, 2008年2月)・同「近代江西省における手工製紙業の展開」(『日本海域研究』第40号, 2009年2月)・同「近代福建省における手工製紙業の展開」(『日本海域研究』第41号, 2010年2月)を参照されたい。
- (2) 「中国紙傘之製造及出口」(『工商半月刊』第1巻第18期, 1929年9月15日, 調査)1頁。実業部中国経済年鑑編纂委員会編『中国経済年鑑』第11章(商務印書館, 1934年)839頁にも引用されている。なお、同書の調査時期は1932年から1933年上半年までとなっている。
- (3) 近代中国土紙業に関する研究動向及び関連資料などについては、拙稿「近代中国における手工製紙業に関する研究と資料について」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第29号, 2007年3月)を参照されたい。
- (4) 前掲「中国紙傘之製造及出口」(調査)1頁。
- (5) 中国実業部国際貿易局編『中国実業誌(江蘇省)』(1933年)第8編956頁。
- (6) 前掲「中国紙傘之製造及出口」(調査)3頁。紙以外の材料も、ほぼそれぞれの地元のものが用いられた。
- (7) 前掲書『中国実業誌(江蘇省)』第8編952頁。
- (8) 前掲「中国紙傘之製造及出口」(調査)5頁・8頁。
- (9) 「中国之傘業」(『中外経済周刊』第99号, 1925年2月14日)13~15頁。
- (10) 中国実業部国際貿易局編『中国実業誌(浙江省)』

- (1933年) 第7編417頁。
- (11) 注(1)を参照されたい。
- (12) 前掲「中国紙傘之製造及出口」1頁。
- (13) 前掲書『中国実業誌(浙江省)』第7編417頁。
- (14) 『支那省別全誌(浙江省)』(1919年) 662～663頁。
- (15) 前掲書『中国実業誌(浙江省)』第7編433頁。
- (16) 温州市志編纂委員会編『温州市志』(中華書局, 1998年) 1,188頁。ただし, 意外にも, 永嘉県地方誌編纂委員会編『永嘉県志』(方誌出版社, 2003年)には製傘業に関する記述が全くみられない。
- (17) 伊欽恒「永嘉県之生産事業(続)」(浙江省政府建設庁『建設週刊』第130期, 1934年9月20日)。
- (18) 「取締洋紙・保護棉紙製傘・温処棉紙廠呈請救済・令三区專員妥籌弁法」(『建設週刊』第137期, 1934年11月8日)。
- (19) 「永嘉県組織・紙傘生産合作社・使紙業職工傘商合作・弁法章則由三方擬訂・糾紛解決呈本庁鑑核」(『建設週刊』第164期, 1935年5月16日)。
- (20) 「杭州紙傘調査」(『工商半月刊』第1巻第15期, 1929年8月1日, 調査) 48～50頁・53頁。
- (21) 『中国経済年鑑』第3編(商務印書館, 1936年) 第12章158～159頁。なお, 同書の調査時期は1934年7月から1935年6月までとなっているが, 当該部分の典拠は『上海中華日報』1934年4月30日に掲載されたものであるという。
- (22) 邵建徳「余杭紙傘」(余杭市政協委員会『余杭文史資料』第5輯, 1989年12月) 122～123頁。
- (23) 前掲「中国紙傘之製造出口」1頁。
- (24) 前掲書『中国実業誌(江蘇省)』第8編951頁。
- (25) 同上書第8編951頁。その他に, 鎮江・丹陽・宜興・溧陽・無錫・常熟・江陰・泰興などがある。
- (26) 《溧陽県志》編纂委員会編『溧陽県志』(江蘇人民出版社, 1992年) 285頁。
- (27) 鎮江市地方志編纂委員会編『鎮江市志』(上海社会科学院出版社, 1993年) 836～837頁。
- (28) 前掲「中国紙傘之製造出口」1頁。
- (29) 実業部国際貿易局編『中国実業誌(湖南省)』(1937年) 第7編378～379頁。
- (30) 同上書第7編374頁。
- (31) 常德市志編纂委員会編『常德市志』(中国科学技術出版社, 1993年) 165頁。
- (32) 湖南省寧郷県志編纂委員会編『寧郷県志』(中国大百科全書出版社, 1995年) 320頁。
- (33) 湖南省平江県志編纂委員会編『平江県志』(中国大百科全書出版社, 1994年) 264頁。
- (34) 湘郷県志編纂委員会編『湘郷県志』(湖南出版社, 1993年) 340～341頁。
- (35) 衡陽市地方志編纂委員会編『衡陽市志』(湖南人民出版社, 1998年) 1,724頁。
- (36) 湘潭県地方志編纂委員会編『湘潭県志』(湖南人民出版社, 1995年) 465頁。
- (37) 瀏陽県地方志編纂委員会編『瀏陽県志』(中国城市出版社, 1994年) 529頁。
- (38) 前掲「中国紙傘之製造出口」1頁。
- (39) 仏山市地方志編纂委員会編『仏山市志』(広東人民出版社, 1994年) 1,118頁・1,151頁。
- (40) 前掲「中国紙傘之製造出口」1頁。
- (41) 浦城県地方志編纂委員会編『浦城県志』(中華書局, 1994年) 406頁。
- (42) 大田県地方編纂委員会編『大田県志』(中華書局, 1996年) 353頁。
- (43) 江西省靖安県志編纂委員会編『靖安県志』(江西人民出版社, 1989年) 241頁。
- (44) 家内手工業と工場制手工業の発展段階の差については, 弁納才一『華中農村経済と近代化—近代中国農村経済史像の再構築への試み』(汲古書院, 2004年)が論じており, 参考になった。